

スマトラ島沖地震被災国 における女性の人権問題

2005年3月

序文

この報告書は 2004 年 12 月 26 日に起きたインド洋津波の被災国で救済、復興、再建に携わった女性団体とグループの共同によるものである。2005 年 2 月 13 日、14 日に the Asian Civil Society Consultation on Post Tsunami Challenges が開かれインド、インドネシア、タイ、ビルマ、スリランカ、モルディブから女性団体の代表者が参加した。参加者たちは女性へ深刻な人権侵害が行われている、広範囲に渡って女性が復興プロセスから制限、排除されているなどの理由から、津波の余波¹での女性の人権侵害に焦点を当てた包括的な報告書を出す必要があると痛感した。

報告書へ詳細な証言を寄せて頂いた次の方々へ深く感謝致します。

Titi Soentoro of Solidaritas Perempuan (インドネシア)、Fatima Burnad of Society for Rural Education and Development (インド)、Pranom Somwong of Migrant Action Plan (タイ)

報告書の目的

- インドネシア、インド、スリランカ、タイ、ビルマなどの津波被災国における女性の人権侵害に深い懸念を表明すること。
- 津波被災国の国際援助調整機関としての国連、被災国の政府、復興・再建プロセスに携わっている国内・国際 NGO 組織などの注意を、復興プロセスで適切に対処されるべき女性への人権侵害と女性のニーズに引きつけること。
- 上記の国々で起きている女性の人権侵害問題に取り組むよう勧告すること。

津波による被害の中でジェンダーの視点に焦点を当てる理由

2005 年 1 月、ジャカルタ訪問中の記者会見で国連アナン事務総長は「津波の余波で女性特有のニーズがあるのではないか」という質問に「女性も男性も同様に苦境に喘いでいる」と答えた。インド洋津波がその大波と共に奪った多くの命には男性と女性の差はなかったかもしれない。しかし女性は危険な状況での出産、レイプや虐待の増加などある種のジェンダー問題特有の余波を生み出した。スリランカでは女性の死体が犯され、濁流からの救助の代償としてレイプされている。

¹ APWLD (apwld@apwld.org)に情報やご意見をお送りください。APWLD はアジア太平洋の 21 カ国にある女性団体の女性人権地域ネットワーク。

私たちは被災国の政府、復興・再建プロセスに携わっている国内・国際 NGO 組織、国際援助機関、国連関連機関などに救援・再建活動が人権、特に女性の人権を保護し推進するような枠組みの中で行われるよう要請した。普通の状況でも女性は軽視されたり弱者にされたりすることが多いのに、このような状況の下では経済的に不利であること、選択肢が限られていること、情報が得られないことなどの理由で女性はさらに多くの危険に直面することになる。大災害が起きると男性を中心とした社会構造を反映する現行の手段を使った救援が行われるため、女性はさらに不利な状況に置かれ、救援へのアクセスから排斥される。津波の被害者の多くは女性であるにもかかわらず、女性は災害救援活動へ参加することもできず意見も通らない。その結果、食糧を得る基本的権利から住居を得る権利まで女性の人権が侵害されることになる。

女性特有の問題

女性団体がアチェ²(インドネシア)、スリランカ、タミル・ナドゥ(インド)で行った調査によると、津波の被災地で女性が直面している最も深刻な問題は次の優先順位となっている。

1. 救援物資、避難所、住居へのアクセス

例えば、タミル・ナドゥでは、ミルクの配給がないため乳児が死亡している。食料、マットレス、毛布などは大人一人に支給されるが乳幼児への配慮はない。その結果、インドネシアでは母親は食べ物を子どもと分け合うため常に空腹で、雨季の間は地面に寝ることになる。女性が特に必要としているものは緊急支援物資の優先リストに記載されていない。被災地域の要望を聞かずに避難所や住居の建設が進められているため、その形や大きさは適切な住居、土地に住む権利や人間の尊厳を侵害している。さらに民間部門の開発により、多くの人々が自宅へ戻ることはできないため女性や子どもは代替地も決まっていないうちに立ち退くよう迫られている。

2. 健康問題

緊急に必要なのはトラウマカウンセリング、妊婦および出産後のケア、女性の産婦人科医、総合的なケアを行うクリニックなどである。退去せざるを得なかった女性の性と生殖に関する健康問題には特に早急な対策が求められる。被災地には 15 万人以上の妊婦がいて、そのうち 5 万人がこれから 3 ヶ月以内に出産予定である。アチェでは雨の中での出産など不衛生な状況下での出産をボランティアが目撃している。津波で赤ん坊を失った授乳期の女性にも特別なケアが必要である。Tamil Nadu にある病院は乳腺炎に苦しむ女性の治療を

² Flower Ache and Solidaritas Perempuan

いまいな理由で拒んでいる。国内避難民（国内避難民）避難所で女性が置かれている環境はさらにひどく、プライバシーもまともなトイレも生理用品も無い。

津波を生き延びた女性のトラウマを癒すための心理カウンセリングは軽視すべきではない。長期間にわたる復帰のためには食・住が確保された後に心理的なサポートを提供することが不可欠である。

3. 女性に対する暴力

国内避難民避難所でレイプや性的虐待が行われているという報告があるが、レイプの犠牲者は身の危険や村八分を恐れて警察へ連絡しようとならないため、過少報告であることは明らかである。避難所では常に身の危険と恐怖がつきまとう。若い女性は保護と食べ物を得るために結婚を強制される。アチェでは軍が女性の人権擁護者に暴力を振るった事例がある。

4. 失業と生活

女性被災者は土地、住宅、備品や職場などを破壊された結果、職を失い、生活する手段を失った。何もすることのない避難所での生活が2ヶ月続いた現在、女性たちは故郷に戻って家を再建したいと思っている。しかし被災国の中には、人々にこのような権利を与えないところもある。アチェでは、軍事政権が急ごしらえの「バラック」に人々を強制的に住まわせ、村に帰ることを許可しない移転計画に着手した。タミル・ナドゥでは、政府が漁民に船や網を用意する代わりに、海岸に住んでいた漁民を強制的に退去させ、観光業者に使用させるために砂浜を清掃した。スリランカでは、海岸から100メートル離して家を再建するという規則が強制退去というもう一つの津波となって漁民に押し寄せている。

5. 教育

精神的トラウマに苦しむ子どもを癒すためにも学校を再開させるのが最善の方法である。教育活動の再開に携わるすべての関係当局は環境を整え、子どもを支援するサービスを提供しなければならない。スリランカでは、避難所に生活する子どもは授業のために椅子や机を備えた公民館を求めている。

タイでは、津波の被害を受けた地域に集中して住んでいる、合法的あるいは密入国した何千人ものビルマの出稼ぎ労働者の置かれた窮状がとりわけ心配されている。タイに住むビルマ人労働者は災害で受けた被害の実状を把握できなかった「自国の政府」によって海岸に取り残されている。タイの役人はビルマ人労働者の家族や破壊された生活に対応するどころか、観光客をあらたに誘致するために浜辺をきれいにすることだけに関心を示し、ビルマ人を追いやり、脅し、無視した。何千人にも労働者が津波で死亡し、災害から2ヶ

月たっても遺体安置所に置かれたままだ。移住労働者の親族は逮捕を恐れて、愛する肉親の遺体を引き取ることもできないでいる。多くの人たちは就業許可証や書類を海に流されてしまった。ビルマの労働者は法的に弱い立場にあるために公的な援助を受ける資格がない。

勧告

APWLD は津波で被災した女性特有のニーズに取り組むために、被災国政府、復興と再建事業に携わる国内外の N G O、国際機関、国連の関連機関に下記の事項を要求する。

1. 難民問題に取り組む役人や民間機関の職員はジェンダー問題や女性特有のニーズを認識し、対処すること。男女中立の救済、復興政策では、家父長制的な社会秩序を助長し、女性を不利な立場に置くことになる。
2. 妊婦や子どもを亡くした授乳期の女性の健康問題に取り組むこと。栄養価の高い食事を含む特別の救援物資が必要である。すべての避難所、仮設住宅に、子ども用ミルクを常時提供すること。
3. 避難所の職員や警備員を研修して、避難所や移転先でジェンダーに基づく暴力や虐待から女性や少女を確実に守ること。
4. 女性の人権擁護者を、特にアチェの軍部による暴力行為から守ることを保障すること。
5. 女性のニーズに確実に取り組む。特に避難所の運営、災害対策委員会から復興事業のための政策決定機関に至るまで、協議や意思決定過程に女性を参加させること。
6. 未亡人、家族を養っている女性、障がい者、高齢者、少数民族や(社会的に差別された)最下層民など社会から無視された女性に特に注意を払うこと。
7. インド政府は津波の被害者がカースト制度や宗教で差別されることなく、支援を受けられるように保障しなければならない。復興事業への公平で差別の無いアクセスを保障するために、最下層民、イルラ、イスラム教徒や少数民族の代表を復興のすべての段階から参加させること。
8. 女性団体の再建と機能構築を促進すること。女性の NGO,CBO では津波の被害で多くのリーダーが死亡または行方不明になった。

9. 生活の手段の再建と雇用の創出を早急に進めること。
10. 女性と子どもは適切な住宅や土地に住む平等の権利を持っている。移転の取り組みは国際的人権基準に即して行われることを保障すること。
11. 被災国政府は、もと住んでいた場所に戻る国内避難民の権利と浜辺や沿岸の土地に戻る漁民の権利を、譲ることのできない承認されたものとして認識すること。
12. タイ政府は救援活動が行われている間は(特にビルマからの)移住労働者の逮捕を中止すること。またすべての出稼ぎ労働者を含め、その家族とすべての生存者に十分な人道的支援を優先的に提供すること。
13. ビルマ軍事政権は被災した国民を放置したことについて説明する責任がある。災害による正確な死傷者数を早急に発表し、被害者に短期、長期の支援を行うこと。
14. スリランカ政府は被災者すべてに、特に 20 年間以上続いた民族紛争に巻き込まれた西北部地方に配慮して支援物資を公平に配給すること。紛争が終結した地域では、再建計画を実施する前に津波による被害を注意深く調査すること。

インドネシア、アチェ州³

アチェの人口	約 4 00 万人
25 年に及ぶ内戦の死者	約 20,000 人
津波による死者と行方不明者	300,000 人
津波による自宅からの退去者	約 700,000 人
国内避難民に占める女性の割合	60%

アチェ市民の危機的状況と津波の生存者への影響

2003 年に、アチェで戒厳令が敷かれた後、インドネシア政府は独立派武装組織を倒すために大規模な掃討作戦を行った。2004 年 5 月には、戒厳令に変えて非常事態宣言が発令され

³ 情報源：Titi Soentoro (Solidaritas Perempuan)

た。しかし、幾万もの難民への強制退去、拷問、殺人、レイプ、女性に対する性的虐待などはなはだしく人権を踏みにじる武装闘争が続いた。

アチェでの国内外の NGO の活動は厳しい規制下にあった。津波の被災直後、国際人道機関は要請があれば、アチェに入ることを許可された。しかし、これら機関の職員はメウラボとバンダ・アチェの中心部以外の活動では許可を得なければならない。アチェで救援活動を行っていた外国の軍隊は、2005 年 3 月末までに国外に撤退するよう求められた。津波の与えた影響について話し合い、救援、復興を調整することを目的に 2 月にバンダ・アチェに召集された NGO 会議はアチェの軍当局によって禁止された。

国際人道機関の活動に対して行われた規制は、安全確保と救済活動を調整するために取られた措置だといわれている。しかし、これらの規制は必要とされる僻地の救済活動から地域社会を孤立させ、継続中の紛争やそれが住民に与えている影響について独立した人権監視活動を行うことができないようにしている⁴。

津波の災害から 2 ヶ月たっても、アチェの西海岸や北スマトラの僻地の村では援助物資や医療支援をほとんど受けられないでいる。Rumoh Kita のような救援部隊は遺体埋葬班が腐敗した遺体を運び埋葬ができるように、遺体を入れる袋、ゴム長靴やマスクがほしいとの要請を今でも受けている。バンダ・アチェから車でたった 2 時間ほどのところにあるシグリでは、生存者が食料や医療援助を受けるのに苦労をしている。

復興支援における対外融資と市民の参加

2005 年 1 月 19 日、ジャカルタでインドネシア支援国会合（CGI, 11 カ国の寄付国を含む）が開かれ、総額 34 億 US ドルをインドネシアに資金拠出することを決定した。この資金のうち 17 億ドルは北スマトラとアチェの再建に使われる。インドネシア国家予算から 28 億ドルがアチェの復興に支払われる。600 万ドルは NGO⁵を通して拠出されるが、これらの資金が CGI の NGO か、国際 NGO またはインドネシアの NGO に流れるのが決まっていない。軍部が援助物資の配給に国内の NGO の参加を許さなかったことは重要な点である。

復興資金の不正使用、情報公開や説明責任の欠如に関する懸念に加え、追加債務の増加は社会保障費の削減、医療と教育関連部門の経費の増加という形を取ってインドネシア国民に債務返済の重い負担を負わせることになる。その結果、国民は貧困にあえぎ、女性がイ

⁴ インドネシア：The role of Human Rights in the wake of the Earthquake and Tsunami. Amnesty International, January 19, 2005

⁵ Kompas 22 January 2005

インドネシアの貧困層の50%以上を占めるため、貧困の女性化をもたらす。さらに、インドネシア支援国会合と国際通貨基金、世界銀行とアジア開発銀行などの国際金融機関が巨額の対外支援資金を利用して、インドネシア政府に圧力をかけ経済の規制緩和、民営化と貿易の自由化策を実行させようとしている。

インドネシア政府の「移転計画」は国内避難民が自分の村に戻る権利を拒否している

「村に戻る」ことが多くの国内避難民のための選択肢になっていないようだ。インドネシア政府は400万人のアチェの住民を復興と再建活動のプロセスから排除する青写真を作成している。前述のインドネシア支援国会合で、同政府は「救援復興活動を管理しやすくするために」数少ない大規模な避難所に国内避難民を集める「移転計画」を発表した。国内避難民は建物の広さや間取りが住宅に適していない、人間の尊厳を保てないような急ごしらえのバラックでできた大規模な避難所に移るよう強要されている。救援団体と生存者はこの計画に不安を抱いている。大抵の生存者は住んでいた村から離れた大規模な避難所に移転させられことを望んでいない。この計画はインドネシア政府がアチェの住民を支配し、浜辺の土地から退去させるために計画したのだという意見もある。軍部が村を整備し住宅を再建するための許可を与え、「見返り」を要求する例もある。⁶

女性の人権問題

アチェの住民400万人には生活への決定権がなく、女性のニーズや問題は完全に無視されている。

Solidaritas Perempuan(Women's Solidarity for Human Rights)のアチェ支部とバンダアチェを拠点とする団体 Flower Aceh の合同ボランティアセンターは、Serikat Inong Aceh, Permata (Perhimpunan Masyarakat Tani Aceh), Matahari, Kelompok Kerja Transformasi Gender Aceh(KKTGA), CCDE など、コミュニティに根ざした女性団体(CBO)の支援を受けて、2005年1月10日から5ヶ所の国内避難民避難所で活動し、女性が直面している問題を報告した：

- 妊婦への医療が提供されていない。妊婦を取り巻く環境は非常に劣悪で、流産や早産が報告されている。未熟児や母乳の出が悪いのは、母親が過度のストレスや栄養不良に晒されていることを示唆している。医療の援助の全くない不衛生な状況で出産がおこなわれ、雨の降る戸外での出産もある。

⁶ PBHI Statement on Resettlement in Aceh

- 乳飲み子を持つ女性をはじめ、子ども連れの女性のニーズは完全に無視されている。食物、水、マットレス、シーツ、毛布は、大人一人ずつに配給されるが、子どもを連れた母親は子どもと分け合わなければならない、空腹に耐えている。濡れた地面に寝ている母親を何人も目にした。
- インドネシア政府は移転計画として、薄い板でできた高さ 3 メートルの細長いバラックを用意したが、部屋ごとの仕切りがないのでたいへん騒がしい。独立した浴室もなく、女性は何週間も入浴を我慢せざるを得ず、性と生殖に関する健康に悪影響を及ぼしている。避難所の浴室の多くは、水の入った大きな容器の周りを囲っただけで天井もない。トイレは男女同じなので女性は不安を感じている。
- コンロが足りないので料理やお湯を沸かすのに並ばなくてはならない。煮沸が不十分な水を飲んで下痢を起こす女性や子どもが出ている。
- 配給や保護を確保するために若い女性を無理やり結婚させるケースが報告されている。
- 喪失によるトラウマや抑鬱、避難所生活での不公平や窮乏が原因で、妻や家族に暴力を振るう男性が増えている。
- 2 件のレイプが報告されている。1 件は、加害者が兵士だったので報復による生命の危機を感じた被害者は被害届を出さなかった。もう 1 件は、テントで寝ていた女性のところへ 2 人の男性が忍び込んだケースである。テントに忍び込むのを目撃した他のテントの住人によって犯人は叩きのめされた。テントから出てきた女性は多くの人に取り囲まれて非常に気まずい思いをした。その後、女性は男性ばかりのテントに連れて行かれ尋問を受けた。避難所に泊まりこんだ Solidaritas Perempuan のボランティアたち（一人は法律家）が女性に付き添おうとしたが、男性たちがテントを取り囲んでいて入ることができなかった。
- 女性人権活動家に対する暴力がある。援助物資を配っていた NGO の女性は、援助物資をよこせという兵士の命令を拒否したために殴られた。
- 女性は避難所所の統治、運営、管理に加わるができない。特に避難所の割り当てや援助物資の配分に関しては全く発言権がない。女性は国内外の援助団体や政府機関といった避難所外の組織との交渉の場から締め出されている。

- 教師やボランティアによる仮設学校が避難所で始まった。津波によって多くの教師が亡くなっており早急に教師の補充が必要である。

国内避難民を受け入れているため、自分達自身が米やその他の必需品の欠乏に直面している家族もある。このような家族は、政府の援助やほとんどの救済組織への利用手段を持っていない。

アチェはほとんどがイスラム系住民が占める、家父長制の文化の色濃い州で、シャリア法（イスラム教の法）が施行されている。女性達は公的な場では男性の家族に代表してもらっている。そのため避難所では女性達は避難所の管理運営に関わっていない。シャリア法が強化されるのではないかという懸念が、今女性達の間にある。津波の直後、女性達はベールを被らずに日常生活を送ることに不安はなかった。多くの女性はベールを被ることを強制されたくないし、夕方 6 時以降は男性の親族の同行がなければ、外出を許されないというようなシャリア法の規制に従いたくないのである。

その上、インドネシア政府の政策は、女性を家族の長として認めていない。しかし事実は、何百万人ものインドネシアの女性が家族の長であるし、主な稼ぎ手なのだ。この政策が父親を亡くした多くの若い女性や、夫を亡くした既婚の女性が公的サービスを利用することを阻んでいる。

私たちはアチェの武力紛争にインドネシア政府が関わっていることを鑑みて国際社会に訴える。

アチェと北スマトラの女性を含む住民が再建のための意思決定プロセスに参加することを保証すること。国連と多国籍金融機関は国内避難民に住む場所を選択する権利（以前の場所に戻るか又は国内の別の場所に定住するかを選ぶ）があると断言すること。再定住や帰郷に関する政策や決定は避難民との協議なしで強制するべきではない。

- 復興と再建のすべての段階で、女性特有のニーズに焦点をあてることを保証すること。
- 国内避難民の避難所内での性暴力から女性を守るために、そしてジェンダーによる暴力事件の報告を促すために特定の対策を置くことを保証すること。報復から被害者や証人を確実に守るために、取調べや裁判の過程の中にきちんとした体制を作るべきだ。

7

⁷ インドネシア：The role of Human Rights in the wake of the Earthquake and Tsunami. Amnesty International, January 19,2005

- インドネシア政府は女性の経済的、社会的、文化的、政治的権利を保証し、社会的サービスの利用を確実にするために、女性を家族の長として認めるべきだ。

インド， タミル・ナドゥ⁸

インドで津波の被害を最も受けた地域は Chennai の沿岸地域、Tamil Nadu の州都、聖都 Nagapattinam、Pondicherry, Karaikal、及び Tamil Nadu 州南部の Uthiramerathi, Kanyakumari, Nagercoil である。12,000 人以上が死亡したがその半数が子どもである。海岸近くの村には主に女性、子どもの遺体があたり一面に放置され、木や建物からぶらさがったままの遺体も見られる。集められた遺体も安置所には収容しきれず、積み上げられたままの状態だ。

Nagapattinam 地方だけで 45 ヶ所の「ダリット女性運動」の拠点の村が流され、運動の指導者 18 人が死亡した。このことで多くの運動員は心理的ショックを負った。

カースト制度による差別

女性、子ども、そして社会的に疎外されているダリット、イルラといった階層の人たちのニーズや優先事項への対処が行われているか、に注目する必要がある。ダリットとはいわゆる「不可触民」といわれる最下層民で、普段でも基本的な人権も与えられず、ひどい貧困と虐待に苦しんでいる。こうしたカースト制度による差別という問題がこの津波で更なる悲惨な状態を引き起こしている。彼らに届く救済や援助は少なく、インド政府はダリット死亡者の家族への援助金を十分に支給してはいない。復興作業が行なわれる中、彼らが電気や水の供給を得られるようになるのはいつも最後である。

Paravaipet 村の Karaikkal に住む妊娠 9 ヶ月の Rajeswari は迫ってくる大波から逃げようと子ども達を連れて走った。走り込んだ家は別の階層の家族が住む家だった。ダリットの女性である Rajeswari は入る事を断られ、やむなく、女主人を突き飛ばし、二階に駆け上がったのだ。子ども達の命を救うために。

避難所でのカースト制度差別：Muttukaddu では Ekanthammal (イルラ) は NGO が設置した場所にミルクをもらいに行ったというだけで漁師達に殴られた。ダリットやイルラの人々宛ての救援物資も彼らの手に届かないのだ。

⁸ 情報源：Fatima Burnad, Society for Rural Education and Development /Tsunami Nadu Dalit Women's Movement

漁師達はイルラやダリットの人々が救援物資を手に入れられないよう妨害し、水汲み場では彼らをさげすみ、追い払おうとするので女性達は水を手に入れることもできない。

Karaikkalya や T.R.Pattinam Vadakattalai といった村で漁師の家のメイドとして働いていたダリットの女性達が職を失った。主人の漁師達が生活の糧を失ったため、これらダリット女性達は失業したままだ。

以下はタミル・ナドゥ地区で生じている女性に対する人権侵害の状況についての証言である

子どもの餓死

ヴェラパラム (Vellapallam) 避難所では、ミルクをもらえなかったために Akila という2歳の幼女が死亡した。その次男所で津波により被災した家族の救援にあたっている活動家、Jothi はこの問題を取り上げて公表し、栄養補給を担当する省庁は緊急に子ども達へのミルクの供給を行うべきだと訴えた。これに対しなんら処置は講じられなかったがメディアの注意を惹いた。Jothi はその幼児の死をメディアに暴露したという理由で逮捕され、政権政党に属する政治家から嫌がらせを受けた。ムトゥカドゥのヴィルプラム (Villupuram) 地区では、生後わずか1ヶ月の三つ子を抱えた若い母親が我が子に与えるミルクを求めての懇願を余儀なくされていた。

授乳期の女性と妊婦のニーズ

津波で、生まれて間もない自分の子どもを失った女性たちの母乳に関する健康問題については、国は極めて無神経であるといわざるを得ない。避難所内では、乳房から溢れ出た乳が固まり苦しんでいる女性たちに対して何の手当てもなされていない。女性たちは病院に行き医療処置を求めたがあいまいな理由で断られている。泌乳に悩まされている母親、Bhoopathy は結婚8年目にしてようやく子どもを授かったのに、その生後8ヶ月の嬰兒は津波にさらわれてしまった。彼女は今満身創痕に加えて母乳の塊ができた乳房に悩まされている。ナガイ地区のポリアヤール (Poriayar) にある避難所では治療を受けられなかったのでシダンバラム (Chidambaram) にある国立病院を彼女は遠路はるばる訪れなければならなかった。カライセルヴィ (Kalaiselvi) も同様の痛みを苦しんでいる。カライカル (Karaikkal) の国立病院は、痛みを軽減する注射を彼女に打つことを拒否した。苦痛緩和剤の注入により次に生まれてくる子どもに授乳ができなくなるからというのが病院側の口実であった。結局彼女は子どもを亡くした心痛に加えて肉体的な苦痛を抱えながら生きていかなければならないのである。

避難所には婦人科の医師がいない。わずかにプライマリー・ヘルス・センターから派遣された助産師のみが一般的な病気の治療に携わっているに過ぎない。国内避難民 避難所にはそれぞれ平均して1,500人もの人々が避難してきているが医薬品も医師も十分に整っているとはいえない。唯一 T.T.のみが抗生物質として手に入る薬品なのである。

T.R.Pattinum の村には妊娠中の女性が 20 いるが婦人科医の診察を受けるアクセスがない。Jeeva Nagar で津波が起きた頃出産をした女性がいるが医療援助は何も受けられないでいる。彼女は生まれたばかりの子どもを抱えて苦難にさらされている。

障がいのある女性たちのニーズ

カッタロールでは、Singarathoppu Venmathi は自分の息子を救おうとして丸太に打ち付けられ腕を骨折した。彼女は治療費が払えないので医者には診てもらえず骨折の痛みを苦しんでいる。両方の脚は負傷し腿には縫い合わせた傷口があり腕も骨折している。Kasambu は絶望的な状況の中救済を求めている。「骨折してこんな体なのにどうやって荷物を運べというのですか。これから私は何をして生活費を稼いでいったらいいのでしょうか。」

トラウマに悩む人々へのカウンセリングの必要性

Amudha が住んでいる Devanampattinam はカッタロール地方で最も被害が大きかった村である。津波に襲われた時彼女は咄嗟に二人の息子を抱きかかえて家の中に駆け込んだ。しかし大波がその家を呑み込み、1歳の息子は母親の膝の上で死んでしまった。もうひとりの3歳の子どもはとうとう見つからなかった。その日はちょうどその息子の誕生日だった。Amudha はその日のために用意しておいたチョコレートも新しい服もわが子にプレゼントできなかったと嘆き悲しんでいる。「もう何も分かりません」と彼女はすすり泣いている。「私の目の前で上の子が溺れていくのを見ました。できればもっと子どもが欲しいけど私は体が弱いから。生きていくことは考えられません。死ぬことばかり考えています。衣服も住むところも要りません。私は自分の子どもを返して欲しいのです」

Anathi の5ヶ月になる赤ちゃんは揺りかごの中で眠っていたがそのまま海へと押し流されてしまった。彼女は現在乳の塊ができた乳房の苦痛を少しでも和らげるために薬草療法を続けているが、わが子を失った耐え難い精神的なショックを癒すものは何もない。このように精神的な苦痛を抱えて生きていかなければならない女性が多数いるが、そのほとんどの人々が精神的なケアのためのカウンセリングを何も受けられないでいる。中には発狂寸前の人も何人かいる。Kanyakumari 地区 Alikkai 出身の24歳のMinnは4ヶ月の赤ちゃんを失くし、精神錯乱の患者として病院へ入院を許可された。未亡人 Rosemary は2人の息子を失くしたのだが、自分の子どもを救えなかったことで周囲からのいじめに遭っている。

生計の手段の喪失

ナガイ地区 Kottaimedu の Lakshmi は Thandavakulam の救済避難所に避難している。「わたしたちの生活の糧が全部海へ流されてしまいました。避難所でこんな状態でいつまで暮らしていけるでしょうか。いつ普通の生活に戻れるようになるのですか。どこでどうやって再出発ができるのでしょうか」

救済避難所に避難している女性たちは同様のトラウマに悩まされながら生きている。家財道具も、魚や菓子を売り歩き、せりの時には仲買人を相手に悪戦苦闘しながら市場で魚を商っていた仕事も一切合財雨露をしのぐ程度の住まいと共に失ってしまった。ボートもカタマラン（いかだ舟）も山羊も牛も全て失った。台所用品もなければ着替えの衣類もない。津波は人々から何もかも持ち去っていった。そしてまったくの無一物になった彼らは次の救援物資が届くのを待つみの状態である。整理券や避難所に配達される救援パックを求めて何時間も長蛇の列に並んでいるのは女性たちなのである。さまざまな避難所で女性たちはペチコート、ブラウス、下着などを求めている。

津波の被害があった地域では飲料水に塩分が混じっているため、家族全員の飲み水を探さなくてはならない女性たちの負担をさらに増す結果となっている。

Kancheepuram 地区の Kolathur 村では川からの漁獲で女性たちは生計を立てていた。津波の後川には土砂が詰まった上に塩分を含んでしまっている。その結果魚がいなくなったので村に住んでいる女性たちには生計の手段がなくなってしまった。もうひとつの収入源であるココナツの木も被害を受けている。以前女性たちはその葉を利用して織物をしたり屋根を葺いたりしていたのである。

2月14日、Chennai でさまざまな定住地から集まった女性たちが、州政府から別な場所へ立ち退くよう迫られたことに抗議して一日ハンガーストライキの座り込みをした。

Kancheepuram 地区の Kolathur 村では300人も女性が集まる会合で私たちは飢餓の進行が著しく既に現実的な脅威になっていることを知らされる。子どもたちに与えるミルクがない。調理するための灯油もない。女性たちは雇用の機会を求めている。家族のために一生懸命働いて収入を得たいと強く望んでいるのである。「虫が湧いている古米とか古着しか手に入りません。私たちは働きたいのです。海だけがわたしたちに必要なものを与えてくれる場所なのです」と漁師の女性は言っているが、津波の災害があった後では恐ろしくて海に近付くことができないでいる。

救援避難所

救援避難所は超満員で安全な状態ではなく、安心できない。自分の子どもたちと木の下で睡眠をとる女性たちもいる。

井戸はひとつしか使えないので飲料水が不足している。そのため人々は皮膚病に悩まされている。

トイレも十分ではない。女性は開放トイレを使うように言われているが、そこは避難所から1キロも歩かねばならずしかも夜しか行けない状態である。そのトイレ近くにはいつも男の人たちが座っていてトランプに興じているので女性たちは使うことができない。Karaikkal、T.R.Pattinam、Vadakattalaiの村では被災者のために臨時的避難所が建てられたが女性のための入浴設備はない。そのため夜だけしか入浴できないでいる。

別の救援避難所では、Kemaという女性がビスケットの小包が配給になるのを待つ行列の中で座っている。津波の第一波に襲われたとき彼女の7歳の息子は木に引っかかって死んでいるところを発見された。Kemaにはそれでもまだ残された二人の息子がいるので幸せなほうである。以前彼女は魚を売っていたが、今後は仕事を変えてみたいと思っている。今彼女は何を望んでいるのか。「食べ物と住まいと台所用品が欲しいです」と彼女は言っている。

性的虐待/女性に対する暴力

ChennaiのPattinapakkam Srinivasapuramでは15歳の少女がレイプされ殺害された。その時少女は津波で被災したほかの漁民たちと一緒にプラットホームで寝ていた。

スリランカ⁹

性的虐待

スリランカでは性暴力など最悪な女性の人権侵害が起こったようだ。監督者のいない救助活動中や臨時避難所¹⁰での生活中に、レイプ、集団暴行、女性や少女に対するわいせつ行為、身体的虐待が起きたことが報告されている。遺体は性暴力を受け、女性たちは激流の中から引きずり出されてレイプされた。助けられて無事だったものの、助けてくれた人に身につけていた金のネックレスを盗まれて、荒波の中に突き戻された女性もいた。しかし、性暴力が起こったことはあまり表立って報告されていない。犠牲者は村八分になることや仕

⁹ 情報源：The Women and Media Collective(WNGO), Colombo, Sri Lanka; "Women's groups helping tsunami affected women and girl children" Sunday Island, January 23, 2005

¹⁰

返しを恐れているからだ。

被災すると女性が被害に遭いやすいということは明らかではあるものの、このような女性のニーズに対応する救助活動は遅々として進んでいない。それは女性の安全に対する脅威や、女性に対する暴力事件が誇張されているとか、実際には起こっていないかもしれないとしているためである。The Coalition for Assisting Tsunami Affected Women (CATAW) は津波に襲われた地域に調査団を送った。女性に対してどのような保護が実施されているかを知るためである。調査団は Galle, Tangalle, Hambantota, Matara, Kalmunai, Akkaraipattu, Batticaloa, Jaffna を訪れた。

国内避難民避難所の女性たちは、子どもや自分たちの安全を心配していた。たとえ実際に事件が起きなくても、避難所には恐怖や不安感が広がっていた。仮設トイレに行く途中の少女が2人の男に連れて行かれたが、どうにか逃げ出した。避難所の管理担当者である男性がわいせつ行為を試みたこともあった。アルコール類が避難所に持ち込まれたために、夫たちは暴力的になった。避難所には警官や保安員がいたが、主に秩序を維持するだけだった。警官たちはジェンダーに基づく暴力の苦情への対処の仕方や介入に関して明確な指示を受けていなかった。女性警官が任務についている避難所もあり、そこでは女性や子供は安心して生活していた。

ないがしろにされている女性のニーズ

ほとんどの避難所は男性が管理している。避難所委員会が作られている所でさえ、いまだに男性が主導権を握っている。その結果、性と生殖に関するケア、プライバシーの必要性など女性が特に必要とするものがないがしろにされている。女性は恥ずかしがって、生理用ナプキンや避妊薬を男性のリーダーに求めることが出来ない。妊婦はもっと大変な苦難に直面している。

イスラム教徒が圧倒的な東部地区では、家を失った人のほとんどは親戚の家に避難している。そのため、避難所で支給される食料やその他の援助物資をもらえなかった。

タイにおけるビルマ人移住労働者の窮状

2004年6月の統計によれば、12万人以上のビルマ人とその家族は、タイ南部の4地区においてタイ当局に登録し、一時的なIDカードを発行してもらっている。これらのほとんどの人々は津波でIDカードをなくし、そのうちの7,000人は漁業、建設、観光といった津波によって大きな被害を被った分野で働いていた。タイ国で不法に働いている未登録出稼ぎ労

働者も多くいて、彼らも家族、家屋、仕事を失った。これらの未登録者の多くは女性である。

津波のあと、タイ政府は独断的にビルマ人移住労働者を逮捕し国外追放したが、国内および国外からの非難を受け、逮捕および国外追放は停止された。しかしながら、津波から2ヶ月たった現在もビルマ人移住労働者は丘の上にあるココナッツ畑や、ゴム畑や、バナナ畑に隠れている。仕事を探しに近隣の地区に行き、友人や親戚と住んでいるものもいる。多くのものはしばらくすれば津波がきた地域に戻り、元の雇用者のもとで働きたいと思っている。その頃にはもう雇用者も立ち直り自分たちを雇ってくれるだろうと期待している。ビルマからこの地区や近隣地区に戻ったものもいる。その理由はもう逮捕が行われていないこと、NGOが労働許可証の発行の手助けと緊急支援物資の供給を行っていることを聞いたからである。

津波から生き延びたビルマ人移住労働者にはなるべく早く当局が一時的なIDカードを再発行する必要がある。カードなしではタイ国に滞在する権利を持ってないし、医療サービスへのアクセスもなく、労働許可証を申請することもできない。彼らは恐れと絶望と屈辱感にあふれた生活を強いられている。

配偶者をなくした子どもを持つ移住労働者はますます悪い状況に置かれているが、あえてまたビルマに帰ろうとしない。なぜなら、津波の被害を被った地域から帰った労働者は逮捕されるか、罰金を課せられるか、あるいは採鉱地に行かされると聞いているからだ。現在、タイ当局は出稼ぎ労働者を逮捕したり、ビルマへ国外追放していない。

この地域の人道上の危機により、ほとんどの移住労働者は有給の仕事に就いていない。雇用されている移住労働者も彼らの雇用者が津波により大きな損失を被ったので通常の収入は得ていない。有給の仕事に就くまで、移住労働者が生き延びる一時的な手段として救援物資が用意されている。

多くの雇用者は家族や生計の手段をなくして、ストレスを感じ金銭的にも不安定だ。その結果、一部の雇用者は移住労働者に支払う能力がないか、時に支払いたがらない。移住労働者に漁業地域の仕事を離れることを許さない雇用者もいるという報告もある。

津波でIDカードをなくした移住労働者や、彼らのIDカードを保持していた雇用者が津波で亡くなった移住労働者はTAGチーム（出稼ぎ労働者の権利を守るNGO）のTakuapa地区事務所の支援を受けている。このNGOは一時的IDカード（Tor Ror38/1）発行のため、移住労働者の登録状況の詳細を調べ、その結果この地区事務所は現時点で93人の移住労働者にIDを再発行した。

約 7,000 人の移住労働者が一時的 ID のため Takuapa 地域で登録した。そのうち 5,139 人が労働許可証に登録した。Phang-nga 地区で Tor Ror 38/1 一時的 ID カードに登録した移住労働者のすべての数は 30,572 人(20,391 人の男性と 10,181 人の女性)であった。

色々な原因により ID カードの再発行は時間がかかっている。全国に移住労働者が散らばったこと、情報がおもに口コミで伝わること、まだ彼らはタイ当局に会うことを恐れている、などがその理由だ。専門な問題もある。例えば、スタッフ不足、事務所不足、検索には古すぎるコンピューター、ビルマ語を話すボランティアの不足などが挙げられる。現在 1 日あたり ID カードの再発行は 10 にとどまっているが、これらの問題が解決すれば処理の速度が速くなり 1 日に少なくとも 130 の ID カードの再発行が可能になるだろう。

タイ政府は、移住労働者の再登録や再度のタイ国への入国を手伝っている支援活動者の安全確保を保証しなければいけない。自発的に支援活動に身をおいているビルマ人の移住労働者は嫌がらせや逮捕にあっている。しかしながら、同じ言葉を話し、他の出稼ぎ労働者から信頼を得、隠れている出稼ぎ労働者を探し、食料とシェルターを与えられる人は支援活動をしている彼らだけなのだ。World Vision に属する女性ひとりを含む 3 人のビルマ人の支援活動者が Phang Nga 地方の Baan Tab Lamu という漁村でおりに閉じ込められた。なぜなら雇用者は津波のあとに彼らがビルマ人の従業員をビルマに帰国させるのを手伝ったと怒っていたからだ。

女性の移住労働者に関する問題

- ジャングルに隠れているほとんどの女性は基礎的な医療支援を受けられないし、食料を入手するのに困難が伴う。
- ほとんどの女性は性と生殖にかかわる保健サービスを受けられない。
- 妊娠中の女性は出産前の受診を受けられないし、安産できるという保証もない。
- 小さな子どもを持つ母親は栄養をとることが必要である。母乳があまり出ない母親の子どもには定期的なミルクの供給が必要である。
- 津波を生き残った人達には心理カウンセリング、心の健康管理が必要であるが利用の機会が与えられていない。
- 配偶者をなくし子どもの世話をしている多くの男性移民には特別の支援が必要だ。Khao 島では 3 人の子ども(3 歳と 7 歳と 8 ヶ月の乳児)の世話をしている男性がいるが、子ども達は病気を患っていた。